

イラン・イスラーム革命思想論選集について

イラン・イスラーム革命思想論選集について

この翻訳論集は、現代イランのイスラーム革命の思想的背景を知るうえで必要不可欠と考えられる思想家の著作から、基本的なテキストを選び訳出したものの集成である。この論集に選び出したホメイニー (Khomeinī)、ターレガーニー (Talegānī)、ムタッハリー (Mutahharī)、の三名以外にも、アリー・シャリーアティー (Alī sharī'atī)、ジャラール・アーレ・アフマド (Jalāl Āl-e Ahmad)、のような、イラン革命の本質を知る上で極めて重要な思想家がほかにも数多くいるが、この論集では主として革命後のイランの政治の中枢にあり、革命の荷い手として大きな役割を果たしている宗教者達 (ルーハーニユーン Ruhāniyūn) の基本思想を知ることが主眼としたため、これら三人の思想家を選び出し、そのテキストを訳出した。

これら三名の思想家も、それぞれ数多くの著作をあらわしているため、それぞれの思想家のどの作品を訳すかということも非常に重大な問題となる。

ホメイニー、すなわちアーヤトッラー・ウズマー・ホメイニーの著作の中からは、特に「秘密の開示」 Kashf al-asrār を選んでみた。ホメイニーは、西暦一九〇二年に生れ、若くしてイスラーム思想の研究者として頭角を現わしていた。二十代には、主としてイスラーム倫理思想や形而上学の研究を中心に研究していた。一九二九年に、彼が書いた「導きの燈火」 Misbāh al-Hidāyah は、その分野についての彼の代表作であり、しかも、弱冠二十七歳の青年が現わしたこの書物は当時のコムの神学校の先輩達に深い感銘を与えたものであった。この書物の発表によって、彼はイスラーム哲学思想の優れた研究者としての評価を得たのである。

ところで、イスラーム哲学思想の研究者として出発したホメイニーは、神学校において講義をおこなう時にも、イスラーム倫理思想と社会の現状との

関りを常に問題にしていた。そういう彼の学問的姿勢が、彼を現実離れした形而上学的思索にのみ沈潜するスコラ哲学者にとどまらせなかったのである。

一九四一年に、彼はこの翻訳論集にとりあげた「秘密の開示」を発表している。この書物は、当時出版されたもので十二イマーム・シーア派のウラマーを批判し、いわゆる世俗主義を宣伝する本に対する反論の体裁をとっている。しかし、内容的には、そういう反論にのみとどまらず、当時のレザー・シャー (Redā Shāh) の独裁体制への激しい攻撃を含み、かつ、イスラームの正統的思想を明らかにし、その優越性を証明しようとしている。

しかしながら、イラン革命の研究者達によってしばしば指摘されているように、この書物の中では、後の「法学者の統治権」 Wilāyat-e Faqīh において示されるような宗教指導者の行政への直接介入という思想は示されていない。それは、「秘密の開示」を書いた時代のホメイニーには、まだその思想が生れていなかったからであろうと推察される。それと同時に、この書物を書いた当時のホメイニーは、未だホッジャトルイスラーム (Hujjat al-Islām) の位にも進んでおらず、時の最高指導者マルジャエ・タクリード (Marja'-e Taqlid) の教令や指示を尊重しなければならない立場にあったため、最高指導者の意向を汲んで宗教者の役割を限定するような表現をもちこんだのかもしれない。当時のマルジャエ・タクリードはアーヤトッラー・ブルジェルダー (Ayatullāh Burūjerdī) である。ホメイニーの「秘密の開示」は彼の励ましによって書かれたものであるが、アーヤトッラー・ブルジェルダーは、当時レザー・ハーン国王が強力な独裁体制を築きつつある中で、それに対抗するウラマーの勢力を温存し、かつより強固なものに成長させるために、ウラマーの政治への介入に消極的であった。事実、アーヤトッラー・ブルジェルダーは、一九四九年にウラマーの政治への関与を禁止する宣言を出している。このような周囲の状況もあって、ホメイニーはこの書物の中では、ウラマーが行政に対する監督権を持つことを主張するが、ウラマーの行政への直接介入権を主張してはいない。また、当時は、ホメイ

ニーの思想の中に「イスラーム共和国」という理念が生れていなかったために、国家の形態として王政を容認している。そして、ウラマーが王政に協力し、社会の秩序を維持してゆかねばならないと考えてさえいる。しかし、この場合の王政への協力というのは、レザー・ハーンの独裁体制への協力ということを意味しているのではないことは、この本全体を通じて示されているパフラヴィー王朝に対する激しい口調の批難を見れば明らかである。

ホメイニーは、この「秘密の開示」を公表することによって、独裁体制と植民地主義と激しく対決する、戦闘的で政治的な宗教者であることを十分に宣言していると見なすことができる。「秘密の開示」の出版によって、彼は、それまでのイスラーム倫理、哲学思想の学究としての生活に別れを告げ、今日にいたる人生を選びとったと見なし得るであろう。しかしながら、ホメイニーが本書の中で示しているイスラームの精神に基づく反独裁、反植民地主義思想を、実際の行動に移すのは一九六一年のアーヤトッラー・ブルージェルディーの没後である。それ以前のモサッデクの石油国有化運動の時期にも、この運動の末期には運動から遠ざかっている。その理由は、モサッデクが共産主義者の影響下にあったことについて、ホメイニーが批判的であったためであるとされる。しかし、それに加えて、時の宗教界の最高指導者アーヤトッラー・ブルージェルディーが、前記のようにウラマーの政治への直接介入を禁止する声明文を出していたことが、ホメイニーを石油国有化運動への参加を消極的にさせたより大きな理由であると考えられる。十二イマーム・シーア派の世界では生けるマルジャエ・タクリードの教令は、われわれの想像以上の重みを持つものである。一九六一年に、ホメイニーの師でもあるアーヤトッラー・ブルージェルディーが没すると、ホメイニーはこの年に「宗教法の諸問題の解説」(Tawdīh al-Masā'il)という本を刊行する。これは、彼が倫理、哲学の分野だけでなく、イスラーム法に関しても十分な見識を持っていることを証明するために書かれたものであると見てよい。この書物の刊行により、ホメイニーはアーヤトッラーの地位に昇進する。これ以後、彼

の積極的な反体制活動が開始され、ついに一九六三年に国外追放になる。そして、亡命地であるイラクのナジャフにおいて彼のイスラーム革命とイスラーム共和国のプランが練りあげられていったのである。

「秘密の開示」の書は、ホメイニーの生涯を見てくると、この書の刊行によって彼の人生の方向性が決定されたともいえる重要なものである。この書物に記されている内容は、書かれた時代の状況に制約を受けているために、今日のイランの最高指導者としてのホメイニーの発言とは矛盾する部分も少しはある。しかし、初期のホメイニーの政治思想を知るには不可欠の書であり、この書物全体にみなぎる反独裁、反植民地主義思想は現在のホメイニーにおいても一貫している。

この書物の翻訳のために使用したテキストは *Intishārāt-e Muhammad, Tehran* (出版年記載なし) の版による。文庫本で三三四ページあり、細字で印刷されている。この翻訳では、時間の制約のため全文を訳出することができなかった。第十ページから第四十ページまでと、第百七十九ページから第百九十ページまでとを試みに訳出してみた。

マフムード・ターレガーニーの著作からは「イスラームと所有権」(*Islām wa Mālikiyat*) を選んだ。マフムード・ターレガーニーの著作としては、ほかに「イスラームにおける労働と所有権」(*Kar wa Mālīkiyat dar Islam*) がよく知られている。そのほか、数多くのコーランの章句の解説がパンフレットのかたちで彼によって発表されている。しかし、ここでとりあげた「イスラームと所有権」は現代のイスラームの社会経済思想の動向に与えた影響の強さという点で、やはりターレガーニーの代表的作品とみなしてよい。

現在、イランを中心としたイスラーム世界の各地で、イスラーム的公正の理念を基盤とした社会経済体制を実現しようとする運動が茫洋として起っているが、その社会経済体制のためのイデオロギーの原形は、この「イスラーム

ムと所有権」の中に示されている。いわゆるイスラーム経済論というものが、現在のイスラーム世界においてしきりに議論されて、それに関する著作が、多数出版されているが、それらのイスラーム経済論も、このターレガーニーの「イスラームと所有権」における思想を発展させたものであると見ることもできる。この翻訳作業のテキストとして選んだ「イスラームと所有権」は (Sherkat-e Sahāmī-ye Inteshārat, Tehran) の第十版 (一九七〇年) であるが、この本の初版は一九六五年である。「イスラームと所有権」が出て以後に、特に十二イマーム・シーア派の世界で、イスラーム社会経済体制に関する議論が盛んとなり、たとえば、アリー・テヘラーニー (Ali Tehrānī) が一九七四年に「イスラーム経済」 (Iqtisād-e Islāmī) を発表したり、ハビーブッラー・ペイマン (Habībullāh Paymān) が続いて「イスラームの観点による所有権と資本の考察」 (Bardāshtī darbāre-ye Malikīyat wa Sarmāyeh as Dīdegan-e Islām) を発表したりしている。有名なレバノンの十二イマーム・シーア派の指導者ムサー・サドル (Mūsā Sadr) の「イスラームの道における経済」 (al-iqtisād fī Maktab al-Islām) が出たのも、ターレガーニーのこの本より後のことであり、バーケル・サドル (Baqir Sadr) による著名な「イスラーム経済論」 (Iqtisādnā) も、この本から多くを吸収していると考えられる。また、かつてターレガーニーの教えを受けたことのあるバニーサドルの「タウヒードの経済」 (Iqtisād-e tawhīdī) も、この「イスラームの所有権」を出発点としていると見てよい。

ターレガーニーは、一九一〇年にマーザンダラーンのターレガンに生まれた。コムQomの神学校で学んだ後に、テヘランのセバフサーラル神学校で教鞭を執ったが、レザー・ハーンの独裁体制を攻撃する講義をおこなったために投獄された。モサッデク (Mosaddeq) の石油国有化闘争の時期には、積極的にモサッデクを支援した。モサッデクがクーデターのために失脚した後、彼はフェダーイーヤーン・イスラーム (Fedā'īyan-e Islām) という反体制イスラーム過激派の組織の指導者ナワブ・サファヴィー (Nawāb Safavī)

をかくまったという嫌疑で投獄されている。一九六一年には、メヘディー・パーザルガン (Mehdī Bāzargān) 等と共に「イラン解放運動」を組織して、パフラヴィー王朝の独裁体制打倒のため活動をつづけた。この間、いく度も投獄され拷問を受けたため、その後遺症で足を悪くしていた。彼は、たびかさなる投獄によって獄中でコミュニストやムジャーヒディーン・ハルク (Mujahidīn-e Khalq) (イスラームとマルキシズムの折衷思想により革命をとる一派) と親しくなり、立場はちがうが、彼等に対しても理解を示した。一九七七年には、このムジャーヒディーン・ハルクとの関係を持ったという容疑で再度投獄されたが、一九七八年にはイラン民衆の強い釈放要求に国王が屈して、彼は釈放された。釈放後は、国王を国外退去に追い込んだ大衆デモを指導し、事実上イラン革命成功の牽引者として活動をした。国王の国外退去とホメイニーの帰国後も、革命委員会の中心人物として活躍したが、一九七九年に過労のため心臓発作でこの世を去った。

ターレガーニーは、戦闘的な宗教者達からも、左派からも信頼を得ていた人物であった。ホメイニーとならぶ国民的英雄であったともいえる。ターレガーニーが、もう少し長く生きていたならば、その後、イランに起った流血の内部抗争をあるいは避けることができたかも知れない。

「イスラームと所有権」において、ターレガーニーは、神はあらゆる人間が物質的豊かさを享受できるよう充分な天然資源を準備していてくれると考えている。そして、個々の人間は、その必要に応じてそこから資源を取り出すことができると主張する。イスラームは、そのような神からの賜物の使用权を、万人に平等に保障しているという。イスラームが、経済活動に一定の規制をおこない、個人の利益よりも共同体の利益を優先し、公正の原理の実施をイスラーム政府に義務づけているのは、このためであるとする。彼は、このようなイスラームの基本精神は、イスラームの歴史の初めから存在するが、しばしばその実現が反イスラーム的な独裁者達によってふみにじられてきたと考えている。しかしながら、イスラーム世界には、当初からこのよう

な平等と公正の思想が強く存在していたが故に、非イスラーム世界におけるような過度の資本の集中や、大土地所有制が起こらなかったのであるとする。

ターレガーニーは、イスラーム世界の歴史のこのような特徴を肯定的に評価しようとしている。彼は、イスラームの伝統が近代の資本主義国家や、あるいは共産主義国家に発生する社会的病弊を克服する要素を含んでいるという信念の下に、その論を進めているのである。他方、彼は私有財産制を完全に否定していない。私有財産は、イスラームの見地から見て合法的であり、創造的な役割を果たすものとして評価している。そして、商人や仲買人の役目を、イスラーム社会に有益なものとして考えている。彼は、私有財産を認めることで生じると懸念される退蔵や独占は、イスラームの税制の完全実施によって十分に防げるとする。それ故、彼はイスラームの遺産相続制を強く擁護しているのである。

ターレガーニーは、他方、資産は個人の労働によってのみ獲得されるべきであると考えている。したがって、遺産相続制の承認はこの思想に矛盾するようにも見える。しかしながら、ターレガーニーは、遺産相続制を労働へのインセンティブとして認めているのである。さらに、彼は農地の私有制も承認している。しかし、この場合、農地が耕作者によって耕作されるかぎり私有が認められるのであって、耕作されなければそれは政府によって没収され再分配されるべきだとしている。彼は、イスラームの基本精神である正義と平等ということに依拠しながら、イスラーム法を解釈し運用することを目指しているのである。彼は、政府がこのようなイスラームの正義と平等を実現するための権力機構として存在しなければならないと考えている。そういう政府こそがイスラーム政府なのである。しかも、そういう政府は、彼がイマーム (Imām) と呼ぶところの、宗教法に通暁ししかも人格的に完成した人物によって運営されるべきであると考えている。

ターレガーニーは、イスラーム的正義と公正の理念に基づく法の解釈・運用とそれを可能ならしめるイスラーム政府の実現を目ざしているのであるが、

決して神聖法の厳格な実施ということを主張しているのではない。このことは、この翻訳集の中に訳出した部分からもうかがい知ることができるであろう。彼は、法の運用にあたって人間そのものの持つ弱点や欠点によく配慮し、こまやかな人情を尊重し、きめこまやかな法の設定や実施を考えている。そのためには、イマームをはじめとして、法の運用にあたるものは人間心理について深い洞察を持つ人でなければならないと考えている。ターレガーニーにおいては、イスラームは正義と平等の宗教であるばかりでなく、加えて慈悲を教える宗教として把握されている。

ターレガーニーは、革命指導者としてイラン国民のはば広い支持のあった人物であるが革命成功直後の混乱の中に世を去った。その後、革命イラン内部でイスラーム共和党とムジャーヒディーン・ハルクとの血で血を洗う抗争が続き、結局、イスラーム共和党が主導権を持つことになった。革命体制の中で反対制派にまわったムジャーヒディーン・ハルクとターレガーニーとの関係が、色々ととりざたされたために、現在のイランではターレガーニーはかならずしも肯定的に評価されているとはいえない。事実、亡命したムジャーヒディーン・ハルクの指導者マスウード・ラジャヴィー (Mas'ūd Rajavī) も、銃撃戦の末に射殺された主要メンバーのムーサー・ヘヤーバーニー (Musā Kheyābānī) も革命以前に、ターレガーニーの講義に参列していた人達であった。

しかしながら、現在のイラン・イスラーム共和国が進んでいる方向は、この「イスラームと所有権」の中に示されている路線に近いように思える。実際、ターレガーニーその人の評価は別とし、この「イスラームと所有権」は、現代イランにおいてもっともよく読まれている本の一つなのである。

この「イスラームと所有権」は、三百五〇ページの本であるが、翻訳作業では主要部分の一一六ページから一五二ページまでを訳出してみた。

ムルタザー・ムタッハリー (Murtadā Mutahharī) は、現在のイラン・イス

ラーム共和国において、その思想の学習がもっとも奨励されている思想家である。彼は一九一九年にホラーサーン州のファリーマーンに生まれ、マシュハドおよびコムQomの神学校に学び、一九五五年からテヘラン大学の神学部の教壇に立った。イスラーム哲学の研究者であると同時に、彼は自ら現代イスラーム世界におけるイスラーム思想を代表する思想家である。イスラーム思想の研究者であると同時に創造的な思想家でもある彼は、おびただしい数の著作を表わしている。コムQomの神学校に学んだ時代にホメイニーからイスラーム哲学を学んだ人物で、ホメイニーの哲学思想の継承者として衆目の一致するところである。一九七九年の四月に、革命委員会の中心人物として活躍していた彼が、フルガン(Furgān)と名のる反革命テロリストの手に斃れた時、自らの長男の死にも涙をみせなかったホメイニーが落涙したというのは有名な話である。

数多いムタッハリーQutbīの著作の中で代表作とすべきものは「タウヒードの世界観」(Jahānbīnī-ye tawhīdī)およびアッラーメ・タバータバーイー(Allāmeḥ Tabātabā'ī)の「哲学原論」(usūl-e Falsafeh)の注釈であるといえよう。両著作ともに極めて抽象的な内容を持つ哲学の作品であるため、これらは別の機会に研究・翻訳をしたほうがよりふさわしいと思われるので、今回の翻訳計画のテキストとしては選ばなかった。

ムタッハリーは、革命前にサイイド・フサイン・ナスル(Sayyid Husayn Nasr)などと共に、王立哲学アカデミーのメンバーをしていたこともあり、同時に、アリー・シャリーアティーなどと一緒に有名なイスラーム思想塾ホセイニーエ・イルシャード(Husaynīyeh-ye Irshād)の運営委員をしていたこともあった。こうした経験からも伺い知ることができるように、いわゆるモダニスト達とも協調しうる能力を持った人物であった。そういう意味で、彼は革命政権内部の西欧志向の強いリベラル派知識人と、いわゆるファンダメンタリストとの対立を緩和する力を持った人物であった。

ムタッハリーの思想は、十二イマーム・シーア派イスラームの世界に脈々

として伝わるイスラーム哲学を基盤にしている。それは、意識的存在 (al-wujūd al-dhīhnī) という存在レベルの発見により、他の文化圏の思想には見られない存在論と認識論の統一を果した哲学である。彼の思想は、この存在・認識論を貫徹する究極的論理としてのタウヒード（一元的世界観、あるいは一化の理論）を独創的に把握し、イスラームの公正・正義という理念を支える基盤としている。その論証は精緻で、厳密な一貫性を持っている。非常に体系的な思想家であるといえる。

彼は、こうしたタウヒードの世界観とイスラームの存在・認識論をふまえた上で、人間のザインとゾルレンを解明してゆく。この翻訳作業のためのテキストとして採りあげた「人生の目的」(Hadaf-e Zendegi, Daftar-e Intishārāt-e Islāmī) は、そのような哲学的背景を持った本である。ただし、このテキストは一九七二年に彼がおこなった講演の録音を基にしたものであるため、幾分文章に乱れが認められる。いずれにせよ、彼はこの「人生の目的」において、人間存在の究極目的をタウヒードの視点から解明し、それが正義と公正の実現にあることを論証しようとする。そして、その実現の過程において様々の抑圧からの解放とイスラームの理想を実現する革命がとえられているのである。

ムタッハリーにおいては、実体運動 (harakah fī al-jawhar) を認める近世十二イマーム・シーア派イスラーム哲学のダイナミックな世界観を、さらに実践的な哲学へと発展させようとする努力を認めることができる。彼が、このように、非常に伝統的なイスラーム思想にきわめて忠実でありながら、それを解放と革命の思想へと転換しようとしているが故に、東西いずれのブロックの影響をも排除し、完全独立を目ざす現在のイスラーム革命政府にとっての最重要のイデオログとして、その思想が前面に押し出されてきているのである。

ここにとりあげたムタッハリーの「人生の目的」は八〇ページの本である。この翻訳では、今後のムタッハリー研究のための糸口を見出すことを目的

に、五ページから十一ページを訳出してみた。この「人生の目的」の翻訳にあたっては、国際大学中東研究所研究所員の羽山賢一氏、吉田敦男氏、岩井秀子氏の協力を得て翻訳したものである。

ホメイニー、ターレガーニー、ムタッハリーという現代のイラン・イスラーム思想を代表する人々の思想を研究対象として採りあげてみたわけであるが、この翻訳・研究作業によって、イラン・イスラーム共和国体制の中に渦まいているパトスとロゴスを幾分かは明らかにすることができたのではないかと思う。

現在、わが国のイラン研究においては、イスラーム革命という重要な歴史的事実の本質理解が充分になされていない。ドグマチックな歴史観に支配されている歴史学者は、このイスラーム革命を厳密な歴史学上の概念規定に照らせば「革命」とは呼び得ないと主張する。しかし、イランを含めて現在の第三世界においては、東西のいずれの価値規準にもあてはまらないような事態が進行中なのである。イランの人々が、彼等自らの力で演出した大事件を「革命」と呼ぶ以上は、まず、研究者は率直に革命として認めなければならないのである。そして、この革命を内在的に把握する作業が地道につづけられてこそ、この革命の意味するものの把握が可能となる。この研究・翻訳作業は、そのような内在的把握のための作業過程の一つである。

イスラーム革命という巨大な歴史的現象を考える時、ここに採りあげたような革命イデオロギーが、そういう歴史的現象を全体的に規定してしまっているものでないことは事実である。イデオロギーは、あくまでもテキストにとってのコード的意味を持つものである。他方にコンテキストが存在しているのである。イスラーム革命にとってのコンテキストを明らかにする作業も、今一つ重要な課題として残されている。しかし、ここに採りあげた三人の思想家の作品を知ることは、イスラーム革命の意味解読にとって絶対不可欠であることを信ずる。